

あゆみ通信

VOL. 171

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

親鸞のことば

信じることの意味を考える

涅槃の真因はただ信心を
もってす(「教行信証」)

人をこの迷いの世界から解き放つものは、阿弥陀さまの本願を信じる心である、と親鸞は言います。では、信じるとはどういうことなのでしょう。

私たちが「あなたを信じる」と言う時、そこには自分にとって都合よく相手を信じたいと言う願いが潜んではいないでしょうか。そんな思いを秘めた「信じる」は、真実の真では無いのです。ただ、真実の信でないに分かったとしても、人は自分の都合でしか信じる事が出来ない生きものです。そんな矛盾の中で、阿弥陀さまを信じることを問い続けるのが、悟りへの道の歩みと言えるでしょう。
(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉より」)

善人間 悪人間



稲垣直来住職

親鸞聖人のお言葉に「人は善い人間だから善いことをし、悪い人間だから悪いことをするのである。全ては縁に依るのです。悪い縁が整えば、人間の良心なんか吹っ飛んでしまう」とある。(中略)

戦時中、ガマ(沖縄決戦の時、米軍の攻撃から身を守るために入った洞窟)に入った中には赤ちゃんもいる。そして泣く。その時、周りの目が「黙らせろ」と母親を睨む。赤ちゃんを一瞬で黙らせる方法は一つしかない。

生きることに必死になると、人間の良心など見事に吹っ飛び、他者のいのちに無関心になる。戦争の一番の恐ろしさはそこにある。その場で「いのちを大切に」と正せるものなどいないであろう。

終戦を迎え、苦しいけれどもそれまでの行為が間違いであったと受け入れ、慚愧し、和する道へ先達は大きく舵を切って下さった。しかし、また良心が吹っ飛ぶご縁がすぐそこに来ている。人の眼は縁によって見つめたり睨んだりと変わるが、仏の眼(教え)は、縁に振り回されている私たちを常にみつめている。どちらの縁を選んでも相当の覚悟がいるが、受けて立つのか、和して来た道を死守するのか、選ばなければならない。(稲垣直来「蓮華蔵」《徳因寺寺報》より)

第2組間法会「共に学ぶ正信偈」

日時 7月22日(土) 14:00
会場 法山寺(阿倍野区天王寺町)
講師 新田修巳先生
参加費 500円

第2組間法会「共に学ぶ正信偈」開講

去る5月23日(火)午後2時より、天王寺区の専行寺(武石由美住職)を会場に、第2組間法会「共に学ぶ正信偈」が、講師に新田修巳先生をお迎えして開催されました。組内より、住職、坊守、門徒、推進員など24名が参加しました。



はじめに、先生は3回に渡って「正信偈」を初めから講義してほしいとの要望があったことを告げられ、出来るだけその要望に応えるように努めていきたいと話されました。

資料も多数用意してくださり、まず、教学研究所から発行された「正信偈」の冒頭の「正信偈について」を読み上げられ、なかでも「偈前の文」に触れられ、釈尊の教えと七祖の解釈を通して、親鸞聖人が仏恩の深重なることに報いようと、「正信偈」を作られたことを話されました。

そして蓮如上人の時に、『正信偈・和讃』を日々の勤行に用いられるようになったと。しかしそれらは追善供養の為ではなく、宗祖の仏恩讃嘆であるが。皆さまは「南無阿弥陀仏」は私とどう関係しているのか、名号をどう受け止めていったらいいのか。称名念仏とはどういう意味かと等についてどう考えておられますかと、問いかけられました。

自分は若い頃、お念仏が言えなかつたり、「南無一帰命」(2面へ)

アレン・ネルソンさん

元アメリカ海兵隊のアレン・ネルソンが、日本で平和講演活動をしていること。そして、その通訳が阿倍高の恩師と知ったのが2006年。彼は18歳で貧困が理由でベトナム戦争に従軍。殺戮の中で、ベトナム人も人間であることに気がきます。除隊後、彼はPTSD(心的外傷後ストレス障害)で20年近く、ホームレス状態で苦しみますが、専門医の支えで回復します。そして、平和活動に参加します。

1995年、沖縄での少女暴行事件を知り、来日。以来、毎年4回来日しながら10年近く、各分野で1万回を超える講演をしました。

2007年2月には、第2組即應寺の藤井善隆住職(当時)の尽力で難波別院でも、公開職員研修会と言う形で、アレンと恩師を通訳に迎えて開催されました。彼は2009年多発性骨髄腫で亡くなります。親交の深い佐野明弘住持(加賀光闡坊)に、生前「葬儀は頼むよ」と依頼。今、法名釈阿蓮として光闡坊に眠ります。彼の平和への願いを少しでも引き継ぎたいのですが。(本)



(1面から)の意味が分からなかったりしたが、それぞれ長川一雄先生や仲野良俊先生に教えていただいたことが忘れられない

と話されました。

休憩後は、2002年4月2日に本山の「全戦没者追弔法会」に参拝された時、講師の大江健三郎氏から、「自分は仏教徒ではないが、親鸞聖人の『十方衆生とはわれらなり』と言う言葉に強く惹かれる」また「いのちは殺してはならない」と言う教えは、洋の東西を問わず、広く語り継がれている」と話されたことが心に残ると。「正信偈」は、一宗派の偈文ではなく、全ての人が唱和出来る讃歌であると力強く話されました。(レポート：細川克彦〈佛足寺〉)

事務局

大江健三郎さんは、その講演のことを、2007年10月発行の「『新しい人』の方へ」(朝日新聞出版)に、次のように書かれています。



大江健三郎さん

なお、大江健三郎さんは、今年の3月3日に亡くなられています。南無阿弥陀仏。



「昨年(2002年)の春、京都の大きい寺院で行われた『全戦没者追弔法会』と言う集まりで講演しました。戦争で死んだ一敵、味方と言うのじゃない。兵士であった、普通の市民だったという区別もしない一すべての人たちをいたむ法会、と言う考え方に共感してのことです。私は仏教の信者ではありませんから、この集まりが行われた宗派の寺院も書かないことにします。(後略)」

先生は、はじめに『歎異抄』後序より、「…まことに如来の御恩ということばをばさたなくして、われもひとも、よしあしということをもみもうしあえり。聖人のおおせには『善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり。そのゆえは、如来の御こころによしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあるこ

6月間法会開催

今年3回目となる第2組間法会が、梅雨の、天候不安定な6月16日(金)午後2時から天王寺区の宗恩寺(池田英二郎住職)で、組内の住職や寺族、門徒や推進員23名が参加して開催されました。講師は15組西稱寺の宮部渡先生で、昨年6月以来です。



先生は、はじめに『歎異抄』後序より、「…まことに如来の御恩ということばをばさたなくして、われもひとも、よしあしということをもみもうしあえり。聖人のおおせには『善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり。そのゆえは、如来の御こころによしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあるこ



となきに、ただ念仏のみぞまことにておわします』(聖典640頁)と読み上げられました。先生は若い頃、初めて拝読したときは、善悪が分からないって何故だろうかと、不審であったと。しかし、学びを深めていく中で、善悪と言っても自分の都合で言っていたり、正義を振り回してみても、それは真実とは言えないのではないかと気付かされると。先生はご自分が作成された

「鬼の三部作」を紹介され、始めは節分の「鬼は外、福は内」に自分勝手な在り様を見出され、また桃太郎の童話に、私に正義があると主張することの疑わしさ、また、ご自身の経験を話され、自己中心的な在り様に気付かされたと話されました。

いかに私たちが煩惱具足の凡夫で、誤った判断をすることが多く、自己中心的であるか。そして、そのことに気が付き、あさましいと頭が下がる時(なむあみだぶつ)、煩惱は「真実のはたらき」によって養分が変わっていく、鬼が人間に変わっていくと、具体的に分かりやすくお話くださいました。(レポート：細川克彦〈佛足寺〉)

大推協公開講座に参加



去る6月6日(火)午後2時から中央区の難波別院同朋会館講堂で、大推協(大阪教区同朋の会連絡協議会〈会長細川克彦〉)主催の公開講座が開催されました。参加するあゆみの会からも多くの会員が参加していただきました。

それも、今回の講師が第2組即應寺の藤井真隆住職で、「南無阿弥陀仏一人として生まれた意味をたずねていこう」をテーマに話されたからかも。

先生は、教誨師として関わってこられた少年や少女の手紙や感想文を紹介しながら、お手製の小道具?を使われて、自我中心の私たちに対する仏の呼び掛けとしての南無阿弥陀仏について熱く話されました。

